

木曾路名所圖會卷之六

目次

日光山
見同祠
深砂王宮
御後殿
鐘樓
御廄
慈眼大師堂
新宮鳥居
拜殿
神樂所
龜井
三佛院
水井堂
護摩堂
鼓樓
石燈
御手水屋
下垂石
黑髮山
長阪
石爐
石
辨石觀音寺
神橋
石鳥居
紫洞御鳥居
御本地堂
御唐門
常行別所
稻荷祠
文殊堂
法華輪檻
相輪檻
二王御門
御陽明門
經藏
瑞蘿
五層塔
星宮
尼野
昭和十六年
精誠社

升日御靈舎

新宮大怪獣

新宮大権現
十八王子
三尊石
藥師堂
不動堂
瀧尾社
正觀音堂
子種石
手掛石
七苑泉
白山権現
本社味祖社
山王祠

金剛堂 大黒堂 毘沙門天
行者堂 三笠赤倉祠 捱燈護摩所
千手堂 稲荷小天外酒泉池
辨天王神祠 天堂山

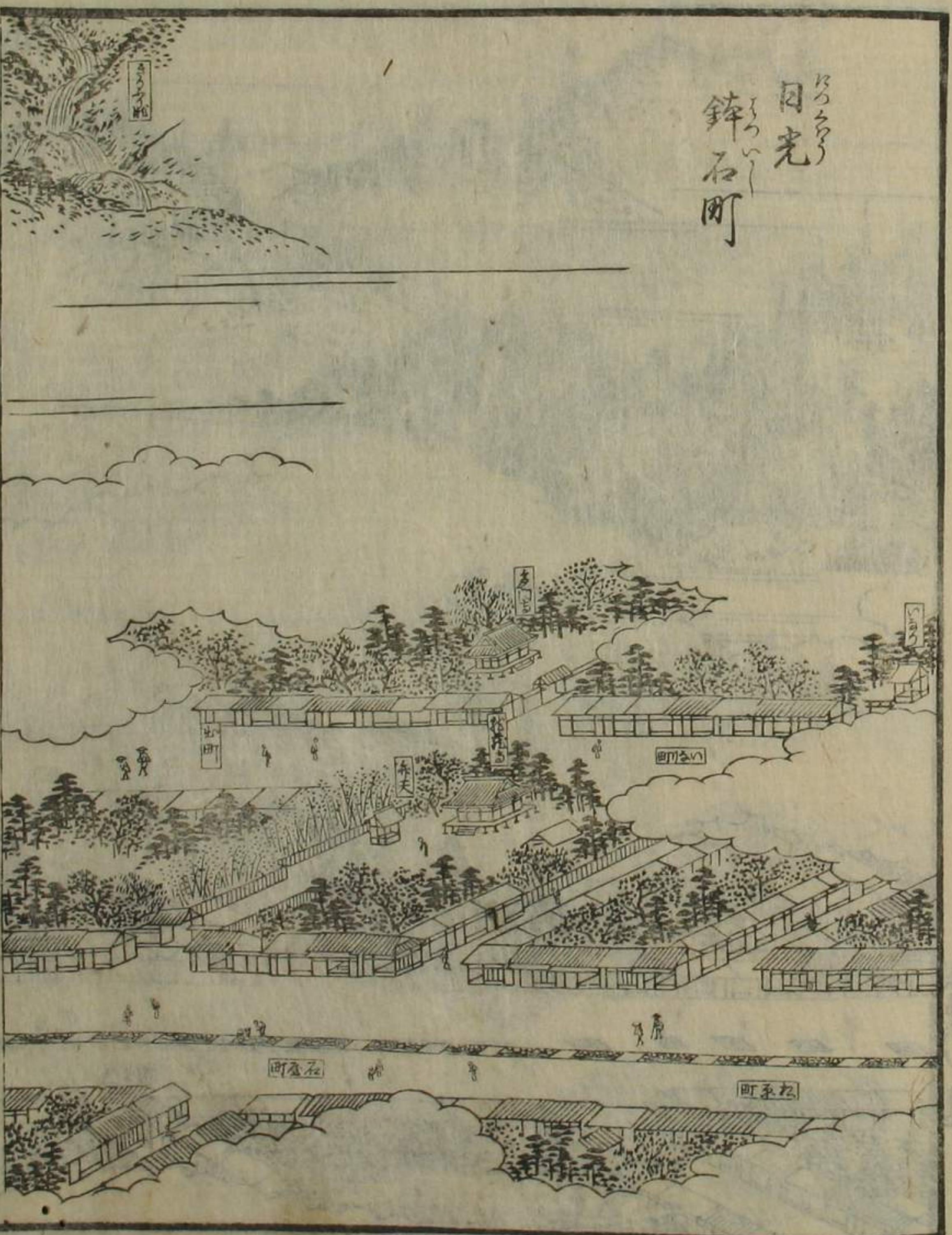
觀足大金骨護羽大不池釋南番
音痕王剛摩黑動石迦谷神
堂石子山堂龍山堂堂

足鞍薬師堂 中禪寺道條 素麪地藏院 二本杉在山
尾掛山 宿石姓富士見山 三蓋赤糸祠 愛宕神社 西谷所

三官寺
善女寺
八幡祠
常行念佛堂
寂光寺
川俣温泉
阿弥陀堂
山堂

木曾路名所圖會卷六目錄 畢

神漢子石立本親吉
湯姥湯幸道紅葉浦石堂戒檀堂三層塔
藥師堂龍燈宇津瀧石根輪摩辛寺所祠
河卷湯赤葛柳依日護根牛鐘樓石
原湯守沼蒲子石輪摩辛寺所祠
自御弓羽大千上歌摩男不中
在所張弓寄手野乃體動禪
湯猶獨演漢天山堂寺
太初自ト御弓羽大千上歌摩男不中
真在所張弓寄手野乃體動禪
子湯猶獨演漢天山堂寺
小中壺幕金土鳳梵寺山三社權現妙湖
真湯陽張腸尾鳳字王祠見水
子山



神橋

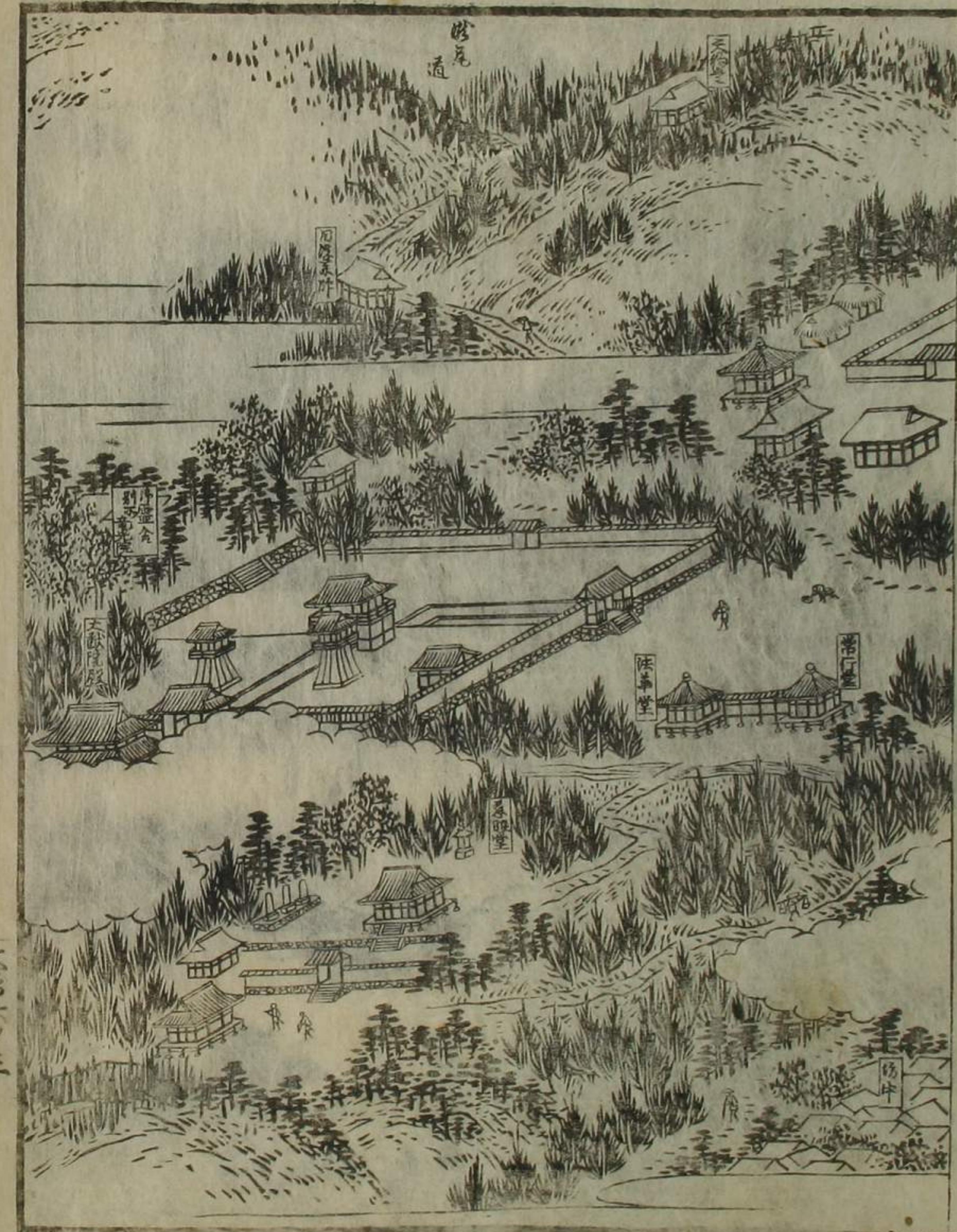
其卦



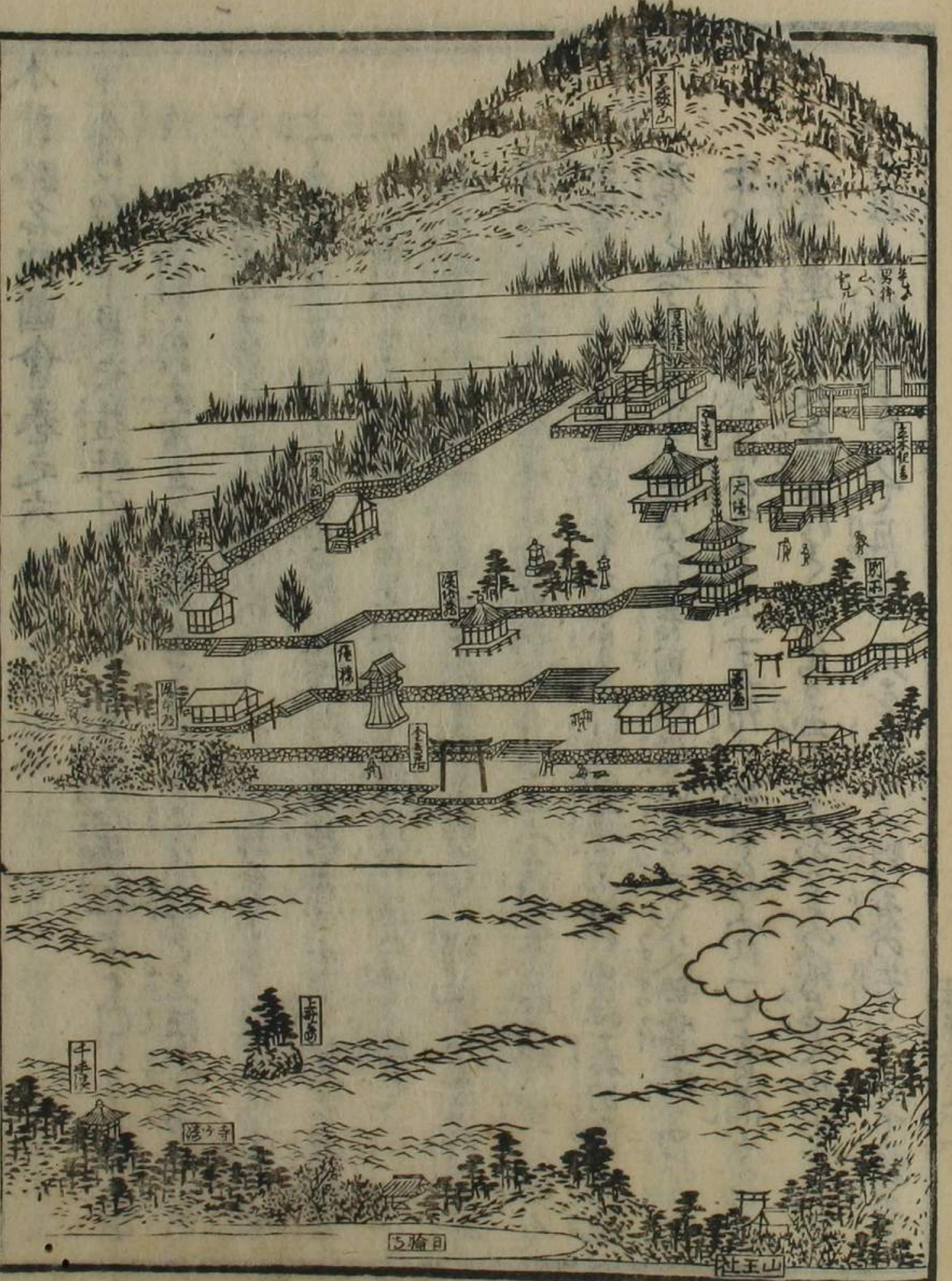
本著六ノ
辛

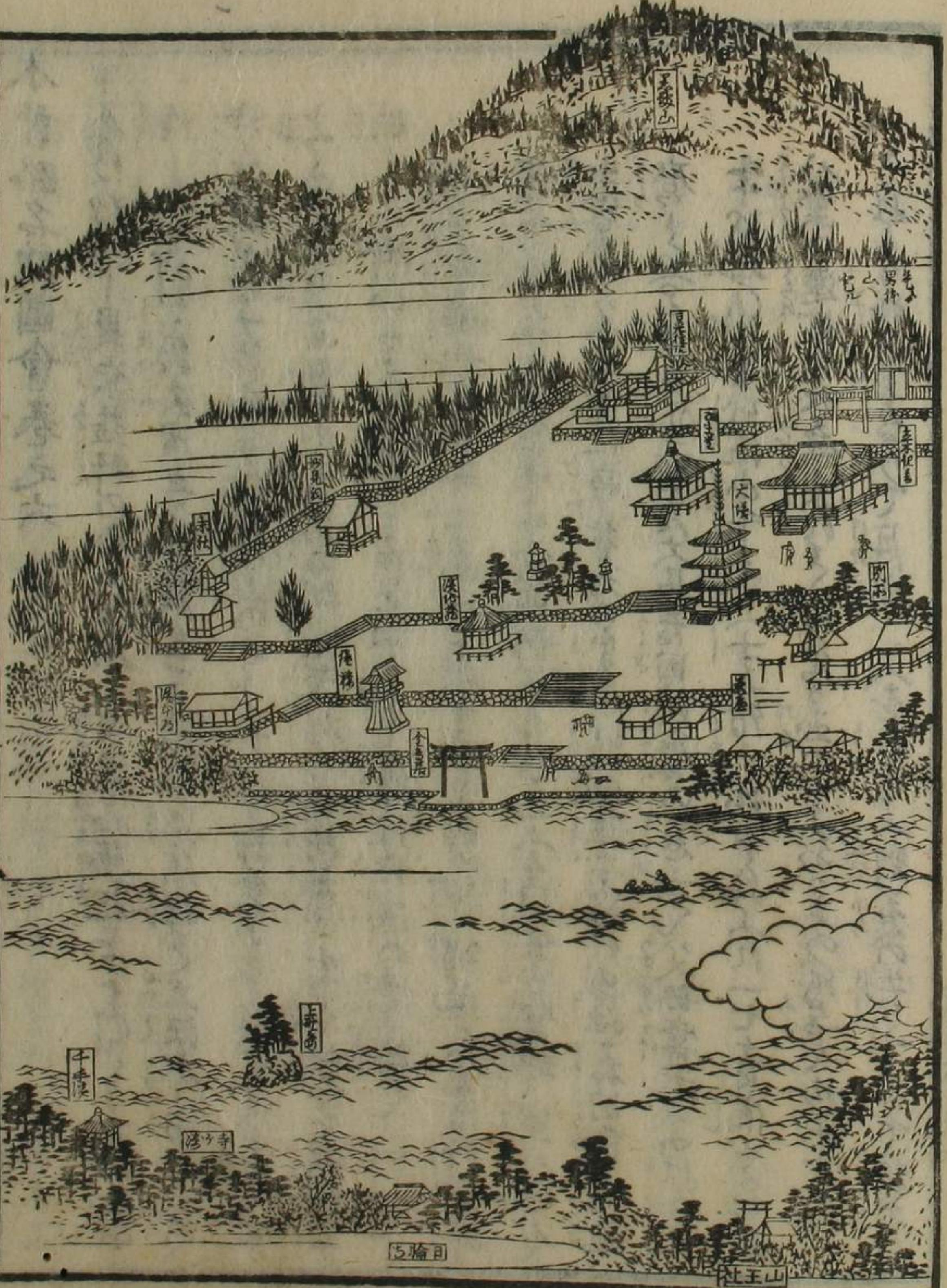












木曾路名所圖會卷之六

今はむく圓原益軒のあらとて日光名勝記をもりてひまく
宿しめさげ宇敷文政三と傳で島て所の駿河色と大沢今市を越
すか所ふつてのちん日光山のちどめくすれ宮より九里其道駿く
上るゆき落多み高ー左右の例と老杉の列樹而して日暮を避けふ
ゆく御山もまふ字アリとほそて羣に佳景の靈場

折ト聖國都賀郡二荒山も人至四八代の帝繩徳天皇の御子神
護景雲元年勝道上人の用釣り上人と同母芳賀郡室八幡そ
出張あり父と垂仁帝第九の皇子彌向尊十一代の源若田氏高藤
磨と之を母と正三位左大臣吉田清磨の息女と父母嘗てよせうれ
幸孤也人出流山千手丈才千手丈才千手丈才千手丈才千手丈
八葉の蓮は葉に蓮葉はく縦考る由のやうあるみのほどと終ふと見て
それより好身とうて月滿よ人を産すと別爰の生すようて雅名

孫系丸と立け後小袖足下見初仰と異相うて佛門本公
ゆく砂波奥村先生土をよせく堂舎と營内業成るむゆと後(ア
生成て出流の親善お奉事とて種々の修飾の用)少たびく不思議
の佈告あり二荒山開創先本公思て后主治ハ廿七歳の時附
園業跡寺にく利根一経ひそむり素念が遙んとくばくお寺
き幸宮四年龍寺伏浦建營佛へく厥后中禪寺ゆくひの
多の靈社をあわぐを拂事創あつう伏半あつて弘法之附登山
一経ひ二荒を日光を改名ひ又急覺大隊も登山一経ひく
頃慈眼大隊中興の因山として神威を海内ふ輦してゆく
其靈場公母ゆけあくも傍へく其あくあと記をあつ

黒巖山

万葉

鳥羽の重みの山若ふ山海原ノ名をすりふ

唐全

新後拾

縁の真夢托葉や朽わんふみの五月雨乃以

公實

身のうふからん幸そどくぬ是故山あはるを雪 賴政

日本紀第五云 崇神天皇之子。豐城入彦命。夢自登御諸

山向東而弄槍。八回擊力。於是奏夢事。天皇以豐

城命令治東國。是上毛野君。下毛野君之始祖也。

延喜式云 神社考云 下野國河内郡二荒山神社名神

余案二荒日光音相近盖其是耶。又二荒和訓與

補陀洛音相似。由是浮屠誘國俗而遂号補陀洛

釋書云 胜道姓若田氏。野之下州芳賀郡人。早山塵累鑽

仰勝業州有補陀洛山峰巒峻峙振古末有陟者。

道以神護景雲元年七月企跋涉路險雪深雲霧

晦暝不能登止山腹凡經三七日而還天應元年

孟夏。又興先志亦屈而退。延曆之始季春之月。發
大誓致勤修且曰。若固不到山頂亦不至菩提漸
達于頂衆峰環峙四湖碧深奇花異木殆非人境。
道堅誓所遂悅目喜心乃結跏舍於西南隅修懺
又三七日道雖究山區未盡湖曲三年之夏造小
船浮東湖西南北湖備極游蕩就勝處建伽藍曰
神宮寺居四載道行與靈境並傳桓武帝聞之勅
任上野講師。又與都賀郡創華嚴精舍大同二年。
州界大旱刺史令道祈雨道上補陀山行法雪甘
雨速降百穀皆登

同書云

圓仁姓士生氏。野之下州都賀郡人也。昔崇神天
皇第一皇子豐城入彦節察東壤其次子留為鄉
人。仁其胤也。延曆十三年生焉。是日紫雲覆產屋。

同郡大慈寺僧廣智。德行兼優。俗号廣智菩薩者也。適見祥雲出尋起所。乃檀越壬氏之宅也。其後仁遂就廣智。智將仁登脣嶽與傳教教悅納焉。世

云圓仁大師登日光山立寺院

日光

又二荒も書に入日の町初石とす又神石とも書ひ今市も

二里の間御樹の松あると農家ありて神石の本戸と入る松原町石

底河町の頭東側

瑞雲山龍藏寺あり。寺尊親音を安に慈覺太郎の繼うるを。下小三十二前の親母音あり。辨財天堂惠心の像あり。是下聖坂寺。二十二番のれ所。すねうり寺。幸町東側中程不偏院門。行道あり。其町の中程不偏寺あり。石裂神とす。又稻荷の神。もあつ。通り筋。神石町と三ツ不別より下神石町。車廻又権門。ありハ。し女町とよ。下神石の中程より。

神石の中程より

○寶珠院家産ゆきて小寺あり。寺内も親音堂あり。運慶の像。豈

坂東のれ所。又町の向てよ

○神石山親音寺あり。寺内のみよ。不干。親音堂あり。弘法太郎の龕。かう上神石所。不善所の名製金。挽打發曲物。もあよ。店有

左初先の松原町より。神所まで。約く十三所多あり。

○下馬は所。左の方。石の原。木林登ア。森の中。下

○星宮。下。寺尊。天童。を。案。に。木。よ。お殿。あり。下。續。木。山。木。出家入峯の而。勅。外。の。堂。あり。星。の。宿。と。ふ。毎年極月廿日より。後者下看。北。惟。子。一。條。老。一。夜。も。と。ぞ。伏。勅。り。一。め。と。て。历年。の。み。月。下旬。は。宿。木。山。二。月。二。日。の。名。出。峯。も。る。か。り。天。下。安。泰。園。家。豐。饒。の。寺。福。教。寺。下。行。法。く。月。前。の。懸。木。

○見。圓。明。神。立。せ。終。ム。

○下。無。石。け。所。下。木。下。方。に。見。ゆ。の。木。下。木。下。木。下。木。下。木。

ノ其後、本太主山都ては、高さを四方あそぐをよしと仰る

は、とす。

○神橋侍の入ケアリ、欄干葱宝珠あり。又朱金うりは、橋亭
宇、山營の蛇れ橋と云ひて、因甚勝道上人をして、登山一
経て、此門よりて橋なり。深妙大王多喜して、祝し。青赤の二
蛇を放く橋と云ひて、乃て上人、倚る山營伏列。蛇の脊小處へ波
が乳の木と云ふ。而の端の乳の木、龜と號す。龍宮へ通ト。又
が、乳の木と云ふ。而の端の乳の木、龜と號す。龍宮へ通ト。又
つひ傳は、橋の内、七社の御神を勧請ある。常に難へあらず不障者
者、紙で書け、橋の内馬を引る川を大谷川と云ふ。河のあだ
名、假橋。標干あり。御本の馬を引る川を大谷川と云ふ。河のあだ
水源も中禪寺湖水より、源を右の方北坂を東山、笄岩谷の坊舎を
經て、坂下に碑あり。御神領の場より、古跡まで。

○假橋 標干あり。御本の馬を引る川を大谷川と云ふ。河のあだ
水源も中禪寺湖水より、源を右の方北坂を東山、笄岩谷の坊舎を
經て、坂下に碑あり。御神領の場より、古跡まで。

○長坂 御宮の道筋神橋より、登り坂とて、坂上町木野あり。
日向道の上、下御月長月の序、奈良御旅所あり。所よ於く、二品立
の御膳所、傍へ人、舞樂法奉事して、あぐれ御祝式なり。長坂より
牛山通、小寺四所あり。けやく、牛山通を院とて、寺内を安達坂を称
盛長の石垣、波安らう道の左は、方津築地と、御殿地より右のうえを

○御本湯 輪王寺宮と、ヤをまわす、うる石の石舟が登りて
あふある小山、うねり、うねりとも、居の程、不波乃く、南海とめぐして
あゆよ達せられ、よう見く、うねり、奥本元和に年、月とあつせう
あ居の鳥、サ、巣石とよの巣石で、ニ丈八尺九寸貫石の下と、数石

よと二丈を越へ上の室の様もさへ六間二尺余す兩柱の間下に二王式
足柱のつる二丈余す石柱とより兩柱より横同一所つて居ふ所あり
長四尺寺様式足柱七分ありとせ浦家を後水尾院宿舎し

左の方

○五層塔二種の酒井瀬波守浦安門より幸る東の革作西の経院
北を承迎南へ度變中央大日如来移り

○御假殿二種の御宮浦造替の附遷まわす所へは所ある

二六脚中の澄波浦より又嘉月十五日より庭上坐毎年浦湯と指
ある別號の金ニツアリ

○二王御門赤は浦の赤石爲本兩股石焼爐兩基と酒安瀬波守源憲
勝利店の浦年廻きり同じく右の方小

○御番所あつは所あてて浦也また所をぬき墨く緒どみづかふ人伏
入まば旅客も通宿の草亭まじう惣義の社傍手物札あるとる客

サツノ久の入まで社便の施設の多れを重く浦門春小見石一通と
出入を石垣より入るが如きと焉ゆう出は徳廣の喜迎不あらず
あ小二の名あらて才一より石も居資二耳立重層才二小石垣の大石を
中里人づる石垣の内は壁接三間餘の大石あつこれ爲阿房石筍園と
クスナリとく石子べ

○二王御門左石阿吽二王長一丈武尺餘裏の方に唐獅子がり御門
城今く左右の金焼爐石焼爐あつ是と徳廣方より浦安門よりおの
方た浦安門三箇所ひ段々廻り模一樹あり

○浦安門本造り浦神馬あり焉坐て下厩坐つて浦安門の浦附
は所である
○浦安門本造り浦水舍の浦安門と建て天井の壓物を渡る施
龍あらす水石林を肥前佐賀の城主鍋島肥前より送り
浦安門より奉行の手賄ふとよそほへ口附にて緒を

○紫銅御馬居あり

○經藏傳大士の像を傍小笑佛とす、磨石階を登りて

○鐘樓鼓樓左の方小朝鮮より献上の廻金燭臺あり、右の方小朝鮮より献ぐる接達あり、總て序あり、朝鮮の奉植塔を

日光道場為

太權現設也

太權現有無量功德、合有無量崇奉結構之雄也

未曾有繼述之孝益彰先烈我

王聞而歡喜為鑄法鐘以補靈山三寶之供、仍

命臣植叙而銘之銘曰

丕顯英烈

肇闡靈真

玄都式廓

寶鐘斯陳

參修勝緣

資薦其福

鯨音獅吼

昏覺魔伏

非器之重

唯孝之則

龍天是護

鴻祚偕極

崇禎朝鮮國禮曹參判植行司直吳敬書

此鐘乃不持、正月二日、濟規式之附屬、どうりに左の方小阿蒙院

今寄進せし、炮臺あり、其制法、日本本來、あらず、あくまで又琉球

より、然、どうり二十六缸の炮臺あり、此諸度方、りそ納の時、炮臺

あらず、向うに所、あるの方、ふ

○御本地堂、辛尊藥師如来三列、鳳來寺碑の某作と、接一、二菩薩十二神將を安置し、佛堂大仰藍にて安置、柱金様巻長押の

な紋を刻み、ついづきも金銀と彫ぞ、すり、備寶殿の天井より八

間、ふ掛り、ひよ龍の画あり、狩野永真安信の筆なり

○陽明門、御武士を所みて、刀をぬみて、佛門内へ入る

山門、佛身をおくる、禁裏の陽明門を模して表ゆ、佛隨身左

右、おもて極彩色、かう裏、風神雷神御門の御額

後陽成院の宸翰うり修小勅額門へも立がくに佛門の結構比類け
彫物生へ茶菴書画ありハ周公旦懸拂。費長房。盧敷琴。高院籍。鶯康。
豊干。王子。献孔子。顏回。とぞ。其外ニ笑四友。六侍。九哲。小至。す。秀才。
記を。小羊。鳩。牛。及。之。楓。生。れ。と。豹。虎。龍。麒麟。狮。子模。い。づ。南。木。
の端。小刻。め。う。あ。づ。其。す。に。ち。う。た。る。所。も。ら。ま。ち。鳳。凰。孔雀。其。外。唐。多。
辛。日。辛。北。舍。獸。う。つ。モ。よ。づ。と。モ。極。彩。ま。づ。う。圓。く。に。滅。全。の。く。わ。
却。す。ゆ。樹。ひ。株。ふ。光。輝。と。て。あ。づ。は。燃。と。か。ー。中。の。通。れ。天。井。左。
右。御。狩。聖。探。幽。守。信。の。ま。う。に。の。間。乃。天。井。又。天。女。が。畫。ア。左。右。の。御。回。
廊。折。廻。一百。間。多。あ。づ。彌。毛。の。樂。天。友。子。獻。ケ。此。君。又。文。を。絵。む。梅。ね。ね。
あ。づ。く。き。が。ぞ。び。侍。門。を。く。庭。上。小。岩。石。を。縮。川。あ。づ。石。今。
曰。く。左。の。方。み。

○神樂堂毎日八。し。女。出。仕。一。て。御。神。樂。供。奉。主。と。同。勤。ふ。う。び。
○護摩堂。辛尊。五大尊。明王。十二天。を。安。置。た。は。所。用。か。そ。正。五。九。月。十。

一日。より。十七。日。す。て。天下。安全。の。御。新。築。の。護。摩。と。修。り。せ。り。ゆ。

○御。唐。門。素。本。造。佛。柱。と。よ。う。龍。下。ア。鷲。梅。竹。の。彫。毛。金。奥。繁。一。向。乃。
彼。風。と。许。由。巢。父。あ。づ。七。賢。七。福。神。等。彫。も。あ。づ。天。井。と。天。女。の。彫。物。だ。り。
は。佛。門。と。神。下。唐。木。柱。を。く。意。終。と。也。ト。て。け。前。の。彫。物。の。主。と。町。
寧。終。す。記。を。く。小。字。を。及。ひ。じ。二。枚。の。板。と。其。ゆ。不。禡。ふ。り。の。あ。く。
い。ゆ。を。細。あ。る。斯。り。と。も。板。の。本。体。用。ひ。て。修。する。あ。く。殊。に。細。工。の。妙。手。神。
に。へ。づ。る。や。の。也。佛。座。板。の。よ。う。唐。洞。も。く。善。く。と。生。殿。毛。玉。り。佛。の。方。や。よ。
○御。瑞。蘿。け。彫。毛。千。草。萬。瓦。あ。づ。毛。瓦。く。の。毛。瓦。本。間。ふ。遊。び。勝。周。
情。愛。蘿。う。

○御。拜。殿。鷲。に。二。筋。ふ。あ。づ。委。脣。の。男。女。と。教。む。お。し。あ。く。

御。秉。慶。ゆ。へ。二。十六。歌。仏。と。かけ。く。佛。す。と。

後。水。尾。院。宮。繪。う。繪。ハ。土。佐。左。近。將。監。の。す。ふ。う。け。御。着。座。の。間。と。

兩。方。と。も。ふ。異。邦。の。名。木。喬。樹。を。集。く。造。り。な。ま。偶。は。富。ふ。へ。ま。源。老。

御本社

鷹羽毛の寝金玉衣服より自然と与えずにはく起辦人とする事あり
則原氏云接一同奉公へそくは長くほの石垣ハ内間洋小見つふ
石垣を後二年うそくしてほのとあよからぬくそくば

芭蕉翁あいお作を道き

御宮以下の差異なる半日辛夷一物

御歌の脚手と性旨は序と成二荒手で書く故空海太師筆卷
のした日光と改めゆふ巻半束とゆくり経すや今は序光一天小
か金きて思深八荒よりあすに民安法の極程うり程候つまくて半と

テ多

あくたうせもまみみ葉木の光

御幸地主某附贈先輩の應作相殿と摩多羅神山王権現あり
毎年正月長月の序神半あり御月光の例幣使と下ノ行のく
宣食代持と又 御名代とて高家方奉勅月ト
諸度方二人奉勅春秋の序祝式處立する半ハ筆端小盡ざる一正又九

- 月と 御座主の宮代をもとをより一山の傍侶社役の面く餘人坐仕
ありて天下安泰れ清福あり
- 奥院序辛亥の後一丁馬陽先生の方
- 相輪燈 照と傳教大師六十四句の序題文を記して歴数年を
- 日辛未所よ建ちてこれを六十列安全の序書の下わが功徳並
盡きる所を以て慈眼大師坐すよ序建宮ゆじへは新小庵より
人倫よりよ及べ愈歎歎單本の既て佛事成ゆると之を觀くくお見
絃縄の本は現至坐の無量の罪滅へま本を承く三惡道の苦
- 免ん半生よ疑あづく甚深微妙の功德あり

○新宮の鳥居 沢額正一位勲一等日光大権現と書れ 一品官公實 法親王の真名

○三佛堂當山の太伽藍寺の弥陀佛長九尺守千手觀音馬頭観音とあく長八尺守慈量丈師の濟度之日光三社大権現の濟度院堂入り又堂内乾の潤小勝道上人の濟度あり良れ方に軍荼利昭王の像ありと作りて開經より

○常行堂 千尊の寶冠の弥陀四菩薩後本摩多羅神立於堂に頼朝との濟度法ね先後より作る御堂父皇平九代天皇の清平六年の奉創なり

○法華堂 千尊普賢菩薩鬼子母神十羅刹女二十番神傳教之門の濟度ありは堂のけりやも人皇五十三代淳和天皇の清平天長二年の建立也堂内小傳教之門濟度の法華經一邦納りて是が堂の間小道ありと神社二町たゞり登るまで

○慈眼大师堂 天海の濟廟あり寛永二十年十月一日遷化 徒勝道上人より五十一世の濟度主として中興の用ありと歎すよ濟度ありと高代不易の基底かと終ても却て人本は之門の濟度ありと濟度を仰ぐと高代不易今之には兩大作濟一体と我が事と名を濟度のすと本多水舎と人を猪亥方よりよとく石燈籠ありとの方れ道が少しだ ○龜井水 ○稻荷社 ○石像の三面佛ありと前左の方本山 御座主廟あり 本照院宮 久遠壽院准ニ后 解脫院宮 久明院宮 等の濟度法要ありと同所 ○文殊堂大師の濟度ありと求聞持堂ありと小鐘櫓經と濟度ありと神ありと開經幕よ ○御別山毎量院あり ○廿日御靈舎惣門坐玉ありと一天門濟額 後水尾院宿施ノ門より御室小池ありと御室の杉色七度を経たる濟度の内よ法度方を取るよの石燈籠凡五百基許あり又朝鮮より献せる金燈籠ありと御堂へ

處より事縁の者と云ふを曰所の方御別所龍光院より無移序脇

成備

○新宮大権現も八棟造りて本堂が殿あり日光大権現也称し此れ
聖神主天子貴令奉地も千手観音を祀り社も仁明天皇清寧とあ詳
年中延喜天降の御創建より元は國中の太社と云ひ東船橋と
思へうは後復の序利豊立穀豐饒福壽長滿の神也神寢本
神く切丸を有せば毛を刀相を刀口とも立人形ありて靈鏡りそ又
小山利宮が着したるが鎧甲其外玉藻縞もて深藍珊瑚珠一つ重き五百圓
あり額朝公の序願書もねへ奥列奉衛巡討の之を拂へく其外
什麼あまくからう守り色勝道上人は後復の序表の神ふ書せ
すよ津神縉もけ社ふねるを毎歲二月二日奉られう二月廿八日より
三社の神輿を振殿小飾と供奉せ奉るが妙善と承日より松島古一
其日小まつて衣裳とがまう親考へ其所地真ありて神靈拂ひまず

- 本殿神輿も平定神幸祭と同三佛堂のあて延喜の年と
車あり一山の衆を申如勅ううこそあ社成物と右の方に
- 金剛堂らう○慈恩堂本木造り幸する慈恩天降の序表う
三十番神不動をば安ん○序供持あり
- 新宮別院安養院文殊の像千手の像らう常行堂の東方ある
○新宮本社○十八王子○毘沙門長五丈许運度の作○山王社
- 阿弥陀堂慈恩天降の他なり○三尊石碑行者一千枝行者○大黒堂運度の
○十王堂○地藏石右の方躰尾の道へ入新宮らう躰尾やで十
二町餘り小坂を登らう中筋下
- 薬師堂は前より靈泉涌出にて種族を除く服百姓には甚多よ
時よりとてよよりて因院坐仰く
- 行者堂坂のこありにあり幸する役小角すとあ小道を寮あり
- 石橋あり筑造と云ふう二便すむらう一所程り

○山王社 向む遠きより奉るも居あり此をあ祥年中急竟ニ昨
御建主より

○不動堂 幸乎明王二重み共よ運度の狹きより向む庵尾と之ふ
施泉うちる階をもすて中行下 ○三笠赤金ぬ神の石造の祠あり
左の方小 ○坂中而不動するなり ○延年松とそ著供養の湯あり
其坂の上へ ○序別所は所にて日え貢とて食あばす者ある其
食物があり強焉が幸くつゞく又捨林おどの貢道具あると壁ふ
石を立て又大檜管あるもかく林て別所くちつて屋及び場中門
中止して木は幸あつ他所もう事アテ初く年次さうひ方角左折く
てと 唐代系の法度方たでりの寄本へ強焉のだら飯が疎る事古例
なり又日光の唐松地坐て奉手臂體勅宅きじゆの松葉玉へ必日を意せ
候ふと是は前よりある事なく甚しき祈福と形すとしひ拂ふ
事あり民衆の祀奉素鷹を祈りしててあゝ神一而云は別不主は庵乃

向づば素鷹若より

○正觀寺堂幸乎長五尺餘乎びよ二十番神 例乎

○拂燈護摩所幸乎石像不動ること神を入掌の傍院御行せしる謹

摩みく靈験ありづきの別所乎もこれあり

○石を居は右の旁小路往あつたを拂て向づよ

○樓門表乎二王裏乎風雷の二神を至り新々弘法大師の御筆よ

て女軒中宮とひづけ門と入てお殿西

○御幸社滝尾大権現祭神因心姫命幸地ち阿弥陀妙乐向海送

の御社す乎五十ニ代祖天皇の御願乎て御造宮ありれ
當山の廻りにある奥底と當社よててあつと之を信御神寧へ是
弘法大師の御筆也左銀右銘の不動の御筆のふ拂れ名號被るの
二王甚か奇异地面を拂ふ事あつて少の出る玉水の御タエ
う伏寝品ねくあり御幸社西の方小

○ 千手堂 宝形造 幸手長六天作 弘法大師の拂地
○ 幸地堂 幸手阿弥陀親王勢至の二尊 佛惠心僧都 拂地幸手日幸

に三身の幸手へ向所後の方ふ

○ 根本祠 小祠幸手西の方への道也

○ 子種石幸手多番手幸手新ふと見ゆるば雪應宵

とく其も

○ 酒泉池 は池亘七尺やどりつむしは所もう酒涌出るやりへ拂て今小

あく酒の香ある泉ワヒ生ずは中にすて不造の社も辨財天也

○ 二年移幸法の役不あつめざうト石の邊向う三社の神本にく日光の立

よつあつてよづれも大本うち中比一株ハ枯く植終も

○ 三十番神堂 疾患吉神幸手六十石の施經の前へお被りト向ん

道のこつてに○ 飯盛松は松古本多く枝づ下へどり拂て

幸手へりも○ 杖拂門とも本のあ辱あり又左の方ふ○ 拂神

馬碑 と於て拂寵の拂馬の碑 うす文長年中濃州拂陣の附は清萬
ふ石れ拂拂利あり一石の碑の福と墨あつて焉てぐつ ○ 手無石
は石の首接見の拂手をめりを拂てとるが左の方の拂拂川うり向ての
高たる處 ○ 外山と拂鬼門天主を拂て西より鬼門の鬼門を拂て幸手
もあそとす宵三百余拂群集に其山拂て化を ○ 水岩岩を暑の月よ
き水石つとて又拂手のよ ○ 不動石ありす伏山拂て金六
○ 七瀧あり水源幸手別と七瀧よ拂て幸手
○ 天神社拂尾下向道右の方山岩小あり石造の社幸手之種の寛文元
辛酉月廿八日菅原大鳥居氏泣眼信幽疏紫を寧府の聖廟とす
小摸して幸手精神性く延寶七年六月幸手は商縫信祐石の社頭
を造受と神威すと靈焉ありて篤業に等一とす ○ 十王堂
○ 地藏堂 築造是所と佛岩と幸手幸手像と運慶の作
幸手うしひ士勝通上之の拂新日十景ふ達の新を寄上人を地藏

薦塚の再被かまばとては所ふ立候て故よ安らへ去くもつ。○裏又上人の廟所骨子あんの墓あり上人の肺骨を中禪も上御傳ふ納土

是う

○佛產宮向指ばうす社の辛地普賢菩薩さうけ所とて妊身の女立候とねを安産をほ所のりれど

○自立持観辛地十一面觀世音ね三種そくら坊金の本成通て中丈等小玉堂も井泉殿らうす社と早の化神之は神の佛主神祕

うまくかく人あらこ神もろ寺所はほど行く辛宮の境内を入石橋と渡

て本造のまわう

○四本龍寺富仕造辛字ハ千手觀もうじふ立大勝道上人伏安寺を山安院の時上人ちうふ住居し終て毫跡たり

○三層塔辛字釋迦文殊普賢を安ん

○御本社お殿あらま神味祖高彦根命辛塔佛と馬頭觀もう

大同三年勝道上人は所不動信一修ふま社と宇敷文と佛一軀もふ又宇都宮の社はも大己貴令ゆうすあ社佛神と專武運長えら葉の佛護神さう神威らうす下野の大社さう神寶と神明の佛性的十一面觀も中將姫蓮のゑひく織もす佛画の切枝珊瑚珠木具外ちがくこれあり末社もへ辨天堂并に十五童子○鹿鳴社不動大日菩薩と安ん○も居あつて○三十番神堂そ神もう

○本地堂馬頭觀音○山王社○稻荷社○探燈護摩所石像別所は不とも日光賣の道具城をもと別所の内柱木かけ一面う十一面觀も伏表して觀もせむ神ううめうてびまの別所を最底の間もくと極惡の復座佛の間あり其やうは柱みす佛種城にて建主を放小様不淨の者入る事叶ふだ不思議ううめうて別所のあは方森の門

○三宮辛地普賢菩薩○一宮辛地文殊菩薩はあ社の佛護所も

○本立寺はかまく神橋の中にひつて西翁の坊舎うびふ西翁の
道をもと太若川の川端を通りて又三種のうちの方橋若川をつゝ七

河をとろく天台律院あり奥雲院と號す。御座主佛建之う
辛雲寺ふ。社様現社經藏鐘門を建て清爽潔淨する靈廟清淨
坐處の佛界う。佛殿の戒光殿一。五法輪王の塔を安置す。

○南岳西谷善女寺谷何とも神橋よりあやよ山をさねり。到

町へ歩。四軒町至町小窓町辛町上中下大工町上中下

板櫻町蓮森町は町の手前小窓町を高橋あり。

○妙道院原町の端トあり。一山の善光院寺門下。○釋迦雲寺
と。座脇の釋迦佛文殊菩薩と惠公の像。並よ菩薩大師の御執有
け臺として常行。毫佛と稱れ。雲のう焉よ。○靈官檜現寺。放妻日の
修造。不休。○八幡社。齒町の坊宇う。う。びふ
○六地藏堂。う。け。まのう。通して寂光寺へり。返り。神橋より

宿老まで三十町餘あり。道への脇よ。

○延命地。我雲寺。それより七八町。ゆ。○池石はるのよ。不取なが。あ。あ。
ゆふ。ゆ。又俗の云。あ。ゆ。ゆ。一生は。とせ。う。馬は。る。の。ゆ
ゆ。ゆ。馬の歸。ノ痕。あ。と。せ。う。き。う。六町。や。ど。り。く。寂光寺の地ふ。い
ばへ。ゆ。

○二軒松並み。一大松。多く大サ牛成。傍。と。道が接。く。二ツの木。お野
せう。け。木。お。と。草。店。う。そ。そ。六七町。程。の。く。左。の。方。

○奉行念佛堂。辛雲院。三字佛。車。牛。の。御。燈。と。御。正。軸。と。阿。須。摩。を
奉。行。は。ま。く。釤念佛のれ。出。又。納。と。ほ。御。よ。御。る。が。う。底。す。く。く
事。往。不。怠。の。念佛。御。行。と。堂。内。大。行。念佛。の。御。作。元。源。上。の。御。れ。あ。う。け
上人。嫡。王。う。將。來。セ。ア。清。霞。の。印。文。出。う。う。に。と。ほ。ち。れ。縁。起。小。石。と。あ
ま。の。あ。か。し。角。く。高。た。所。ふ

○求聞持堂。辛雲院。虚空院。菩薩。慈。光。の。御。燈。う。御。堂。



裏見

瀧

- 一品准后法親王の真鞠ううしても居城入ての方ト○二十番神堂本
ガ一登アそ○不動堂○二箇布金のあ社う又ガ一のがく
○海駿ウ
○御本社寂光大極現多神下照姫余幸也と辨財天女うり奥社
弘仁十一年弘法大師の安奉おう付宝本十二の多羅自身鏡その外
あちこぢり右の方ト鷲向うその源邊ふて相妙く辨ううべよま
尋の布依脇とが如く鷲のあ小出する山傍の岩窟左のゆきとみ
瓦工火除の梵字成四字空海ま玉移すは地もりよふ○二子山
大通山け奥ふへそ○豪士見山あうは峯う富士のる根をやる
か底引ば
○川保の温泉をう女人入湯まうう津幸祐う下アそ
○別而らう寺内小辨財天十五章まみ成事には寺の艮の方に
○羽黒滝うねうるる泉町うや町大工間を通う森の中小

○住生院は寺の一の墓石あり樹門の前より弘法大師の草堂にて此見
門のつゝは寺の名也と曰ふ

○阿彌陀堂幸る延命二年佛坐日の燈之火種より太若川の橋下に立
向河原とすか一町あり

○慈雲寺神移より通十三所移ありキするを慈光大師く又涅槃の御迹
あり寺の名より若川と云ふ

○龍藏寺堂ありば所含滿が圓あり向の岩れより不動の石佛圓塔隣りて
立て此處の圓の塔不懾輪の梵字ありそれより右の山と山宇

○石像の地巻其根とてば又若の川端下

○靈庇閣は閣より服が施を半真半盧山の五老峯青天壁へと金芙蓉
塔もつひはと風色揚圓忠が沈香木成らむ閣とか一極高床
擇か射喬乳香と土和して泥とか一覆小佛が四喬圓もつひは

倉一吉印ふ高山と赤柳ふうう又管の事よ

○骨堂あれある岩張切ぬ丸く法人の骨を葬せその上ふ羅山と拂せられ
碑あり唐小石像の地龕を有り度像六尺许ばく後ふ圓あり慈雲寺
の門とへまとうけますで前徑をば寺れ境内あり三所并の圓而中坐
又河岸山と奇石傍石あり木のまくせ故に佛とて極不梵宗の名号
お書づば求先く伏苦とも年四十又川瀧頂ともてば所と圓東内
高此とてと寫よ紀の高野山の金剛山と有りすとん雲霞もくじふま
事よ○素麁滻あり○平石とて十五重巒の石ありこまてう尾筋
に右の方けうこと高見すと
○二宮山芭翁作如来金剛童子の姿もあり同ドに附れんよ

○中禪寺の道筋神格より中禪もてニ至る所より田母沢の橋を下る

て川向ひと○蓮華石佛也と名ふて○地蔵堂あり所の中経よ

○蓮華石佛ありけむと勝道上人中禪もて通々を修し時總ひ

タメとて故よ此あり右の方本尊の内よ○十八王ふ三種をば聞

の諸尊なりとみれど二所解心と左の門と久ニ合枝ともあるこの

村吉社並町うは所よ○葉障塗キモ葉障塗東日光月光十二神

將十王奪衣波多那形又神明官在ル蓮華石佛より二所をうち移く

左の轟よ○大日堂奉する石像の大日菩薩千臂佛波密尼日而よ

地蔵堂西ノ山所の地蔵龕の像より乾木頭灰白と也古くて平村

縁より出因の地なり偶は地より素と云ふ爲原とて風光明らかす又

大日堂の別と道より右の方へ道の程二十町許少すだ

○裏見瀧

日光
街道



木版画の九三

大谷紀事



まことに寺山道院の寺寺うねぬ山道院の宿駄は寺にあつて

越前あるかたう寺内

○清瀧寺現は御神と天皇舊の所と奉天毘羅神と掌より佛法擁護の佛神うる正月二日間權厚祝りあは宮のうれ叢屋風流立すと小御子あはく小鬼衆あり○清瀧とくす寺う民村至所経

経

○親王堂石う牛尊へふき記世音なり勝道上人牛種の三本親王のうち本姓毛門と附耳一門と長七八年有りて中禪寺の母結界うれば所よ奉立をとせん少廣く結縁あせく坂東十八番巡礼のれ御まゝなみの通へ○足尾村とくす羽山ある所へゆ道へてれうち五里程うつ豆尾が通て上列へとりゆく御親王堂をとく右のゆこの通三間やどりく水沢村三社をとく坂を登きを石社あり○牛王坂とくそれもすなむかとく

○馬込

馬込山入と防山もとすと又ともと移もと信濃もと
この手で日光を里二里あくこく小滝のあくは累積伏河の石勞れ
色巖石うてあぐ一深山種伏河と深沢の草店あり又坂口不地庵堂
育て旅をよ山路修としてちよ歩いびて信濃う登りて大平へ
前ふてあ

○不動岩信濃馬込をこの手でちよ小陰路とすと修業を

ほざりくゆ水

○神木石を庵うと御よぬうすこか一ゆれく

○牛石ともと牛の軒ふけうはば蘿蔓もと拂ひ去りてこれうを

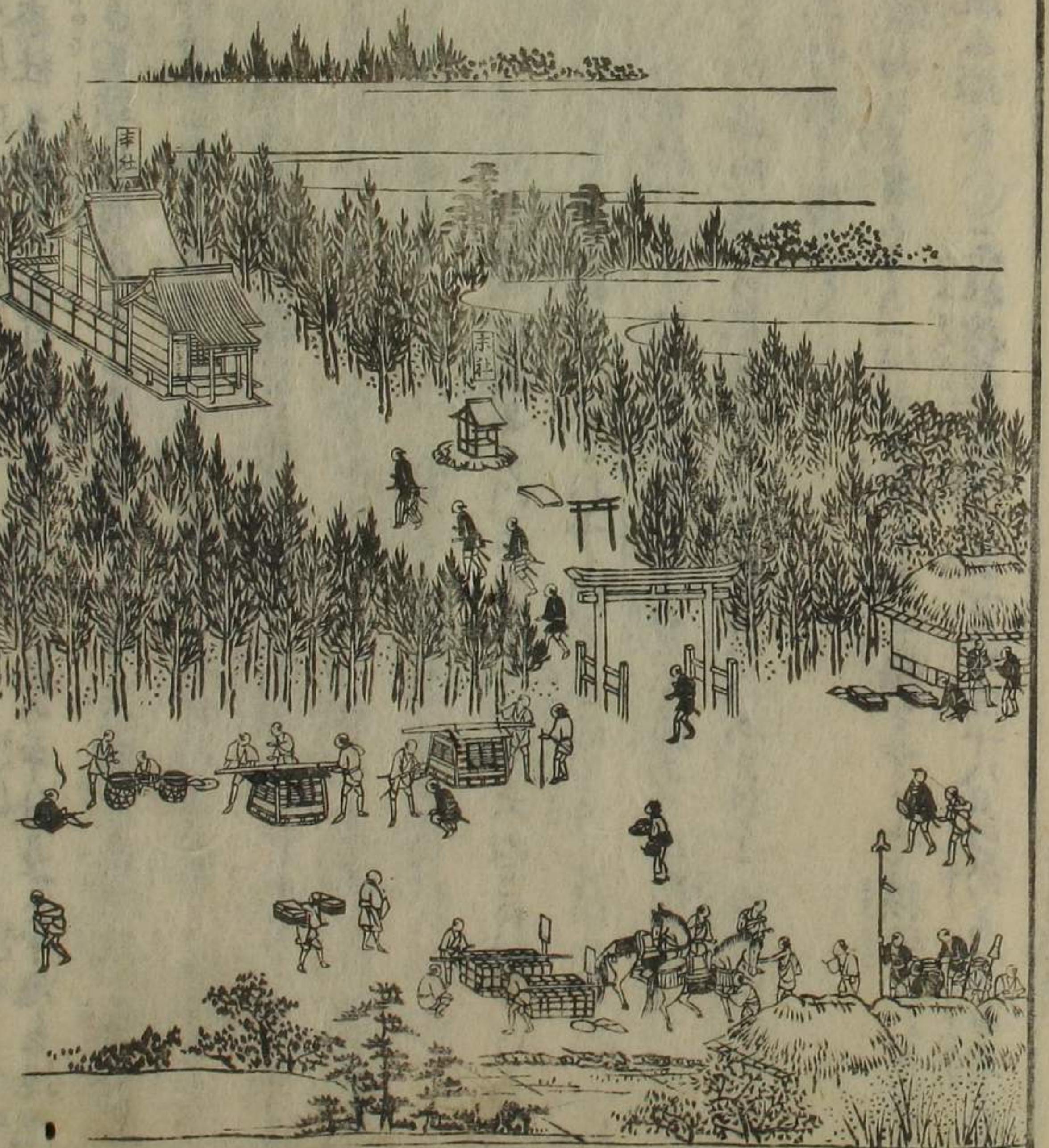
毫トテ又蓋成めぐる種うと今

補陀洛山中禪寺

三里外

別所猪之子と宿難伏とくは前と寺地の幽魏りて寂景と

葦宮



○雲峯あり、東小天邊あそにて星河せいが空侵くうしんして星の裏さかのうちに同雲どううん
雲くもより覆おおる奉まつの時ときふ難むづまま付つああけけりりある人じん清津きよつ
と並なぐて化境かきやうふへふへと織おりる

○湖水長こぶら二里幅ひろ二里あり、一里半許はなの所ところもあり、正面不築樹脩行ふじゆぎゆうぎやう
あり、湖上不築ふじゆすととども其處あち無なく、水面不深ふしんすととだ廣ひろく
深ふかれぬぬども魚嶋うしまをくわもあゆあゆを放はなすととすとと少すくなり、其外ほか
やまと北きた洋よう八は湖こあり、かまた高たかいの島しま不詫ふげ、湖水こある岸きし奇異きいな
靈塔れいとう。○渡わたの地じ御ごすららうとと於おそそうり本もとの太お高たかを入いくとと少すくない
○桂橋けいばし。○不動堂ふどうどう半はん五ご丈じやう王おう。○妙見祠めうじ又支玉さしおのままもああおお敵お敵お
あり、本地龍樹ほぢりゆ。○立木親耆堂たつきしんきどう半はん五ご丈じやう年ねん親耆堂しんきどう、
六ろく丈じやう半はん天王てんのうの像ぞうあり、圓基勝道えんき上人じょうじん立木たつきと其體そのたい也や而が別べつ列れつ、
室むろ中なか縁えん坂東ばんとう十八じゅう丈じやう巡まわ神じん前まへ。○僧人そうじん毎まい往むか來らい、身みの別べつ旅りょのの九く他ほか事こと
例たと多た、雲くも像ぞうがり、五大ご天てんの像ぞう弘法こうぼく大だい師しの拂は船ふね又また勝道せうどう上うの法ほう教きょうあり

○御本社お殿あり奥社大權現と日光三社の辛社坐て車馬を詠陀
千手馬頭延曆年中の傳送立あり神室と種悉地經一卷金字
の法事經一部八葉後一面水牛の秀極象牙北單葉一管海童玉乃
赤衣一領若無要ニ藏の菩提子北殊教勝道上人序誕生の三月天皇
降る陽村其外あくあり毎春正月四日武射かくとう坐すわてあり社司登山
して上列赤城の方小ひりく巻式まきしきもあく赤塚あかづかも當社の神破は
寺てらは巻赤塚あかづかの巻まきめに産うぶふともほ日走ひしゆきめ此佛このぶつとつて
銳洞やいのうへかの矢と拔ぬきともおこれすりて赤城の産子うぶこ山さんを荒あら
あくよく辛社きんしゃの方に男體おんたい山さんも登のる登のる道みちありは所そよ碑ひあり碑ひ有あ
弘法大師補陀洛山ふだらさんの記きあれあり中古滅亡ちうこめつじょうにあらずを准そん二后公辨法
親王再興さいこう一いっじと

○男體山又黒髮山くろがみさんもよけゆよ登のるかふ道みち龜かめ々々て接客せき多く寒
風肌ひづの小徹こてつ身み○二社接觀せきくわん山頂さんてう小立せ終しゆう四十八日よんぱくの行ゆきて毎年七

月七日な峯ねに登のけは七月四日よう中禪寺別べつ所ところより董とうを一七日にがあく
捨すくのりあくあて登のくは二社にじやうはおおくはする信公しんこう聖こう人じん奇き美みの靈れい跡せきを
持もりあく男體おんたい山さん道みち三所さんしょ坐すわば

○戒壇堂かいだんどう幸こうるは秋あき迦か文殊普賢ぼくげんととは所そ不ふ三國さんくにの土どばかりはとと辛から社しゃののもも九く方がた

○根牟社ねむしゃ○摩加羅天まがらてん○山王社さんぎょうしゃ

○三層塔さんそうとう幸こうる五智如來ごちにょらい○探燈護摩とうとうごま前

湖水こずののじじを遙と見みてせせ

○歌うたのの候まわこれれひひ神軍じんぐんに討勝とうしようたたは前まへ小御おぎ凱陣かいじんありて法軍ほうぐん
神達じんたつうち寄よま家いえは佩はひひくくふふくく名な付つけるとぞ幸こうるは右う禪天ぜんてん
殊勒菩薩しゆれふざ金剛童子こんごうどうじ幸こうるは又また他的ほかの入い峯ね山さんの病びやくあり毎年三月
十三日じゅうさん入い峯ね一い四月廿二日じゅうに小牛峯こいのねにに病びやくをを右う供くわ左さ供くわととて事こと並ながりおおよよて向むかの峯ねをを見みゆ

うとうと放ふけられ

○弓張指
○幕張

弓張插 ○ 幕張とあくどきてあうけ原に轄一轄むりより常ふ
トモあるまゝへ日光桂院の神多ふと使令とす年毎ふるがきせせ
も詮鶴のびてゆきのり萬古とすとすとすとすとすとすとすとす

よの離轡いもへゆくをり陽生れとじ番のをあつて終ふひ原と去
あやうく月のひ聖林ゑればあるの花まは向と寒風ふ聞らむ
えどさうが御寝まと寝く一時ふ聞く梅も桜も桃も浦じも一度す
文へこそ盛形の真ふ仙境にあらかと經ふううねば色ふ

湯守もあつてゐれ候際見其御そりが通ひもの
湯えへやく湯守へおあつ三月中旬より九十月の湧まであひの
ちんとトト

店舗舎まで乗車後、
○ 御釣湯 もりつけの湯 指定の
ト まくらゆ へいよゆへやく名ぼうかり
○ 滞湯 なまのゆ
○ 姥湯 うきぎゆ
○ 釜湯 ますゆ

自左順一牛順一茶所
右ノ湯八木湯壹十一あう

○梵字石 ○龍燈石 ○俵石
○千色波 親ち雲あらび水御仙所あり幸る千尋観音勝きの清池

さう毎年六月初日より七内まで通常一七日の約束を定め
私事多々お手の事の如る様状況先づの信を堅固めて行わんが其身の所

驚とあはひ時も右の別所そ一役義定を望み承ぬふ承めぐりて年のから
まことにす

○ 桐原の浦はひらうがまくはゆきの風景いぢん方あく風趣の名跡也はゆきの
○ 風風水 ○ 紅葉浦 ○ 魚沼の浦 ○ 大寄 ○ 大尾

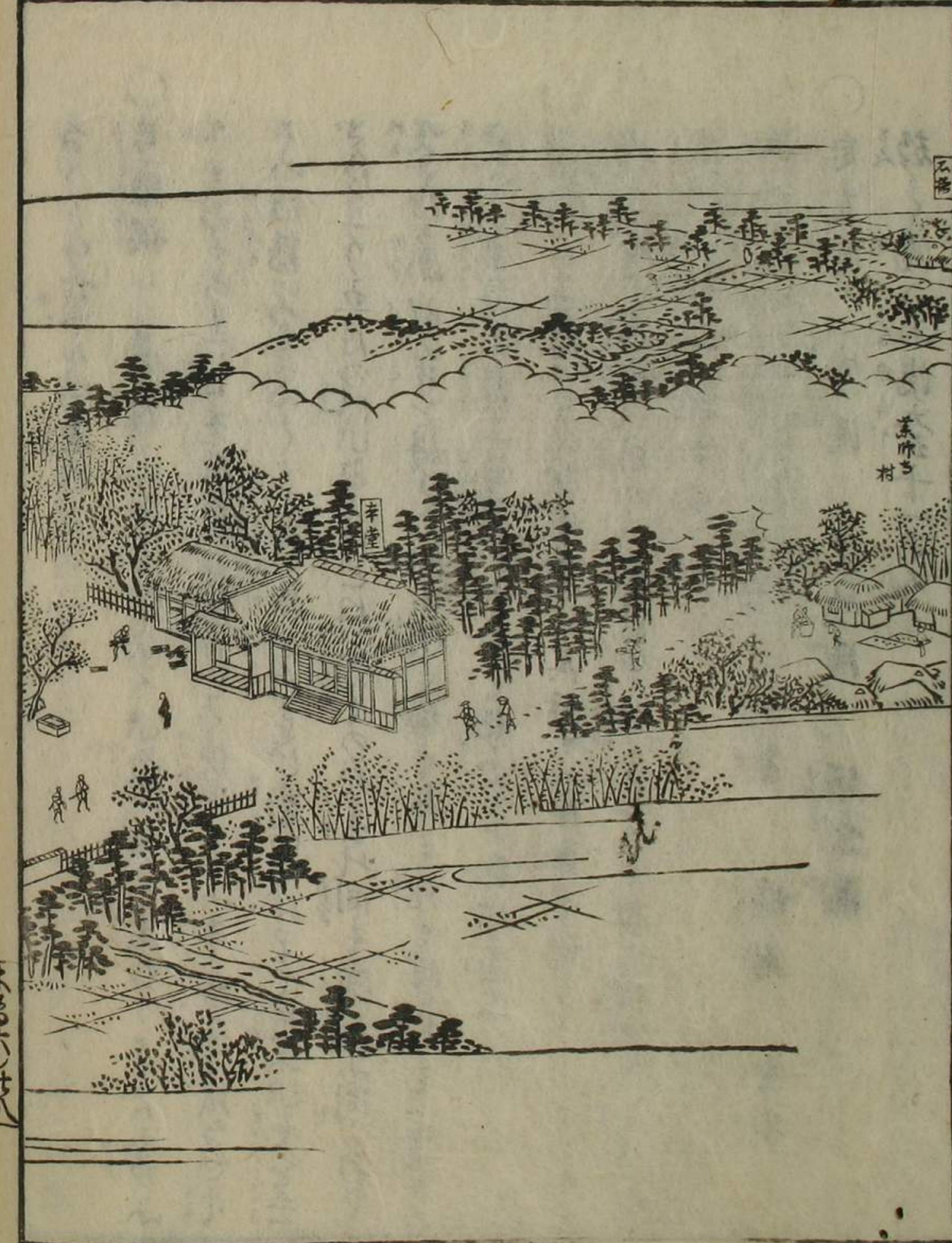
○ 宇治瀧
○ 葛蒲沼
○ 獅子ヶ淵
○ 金ヶ勝 其外名不詳

湯幸の道を別所の脇道通て深見城一里ほどりて鳥浦江木山にて
東をあきらへり

赤坂原、御湯原とよこす。東方二里もあらずしテ、高御神の御湯焼

あらとくに及ぶるに爲て
人

藥師寺



は陽の功能^{ヒヨウノノリ}へ諸病^{ツヅク}ふよ
但^ト一^{ヒト}の陽も積氣^{シキ}と美癡^{ミツイ}を忌^{ハシメ}ナガラ
陽^{ヒヨウ}を^{アサシ}て^{アサシ}ぐを^{アサシ}青^{シキ}蒸^{マサニ}ム^{アサシ}て^{アサシ}へ陽^{ヒヨウ}の年^{ヒヨウノヒ}毎^{ミタツ}年^ヒみ詠^{モロコシ}を^{アサシ}せう又^{ヘン}は^{アサシ}きの

山の名

○太平不動堂の下へ出立

大平不動堂の下へ出立
右の條く日未正中の蓋境梵宮山へと有往してめぐれだがく五
六日も停宿せまわる妻くわねー雅ー續古事記下野國二荒守
嶺ふ湘水あつ度と千町をうり深くとある幸敷ひあ樹林に方ふめぐる
せりども本葉一つあふ浮すび又魚モヤ若ノ魚放てば則浮す
まきくゆくと鷺二荒の権現山嶺ふすと終ふと
日光鳥物名制取
トヘーんまトヒーん
慈心鳥烹燃ふとあくち即葢ようかーたあう尾長ノニ豆
あくち又ニ豆をあう尾長ノニ豆をあく豆に本なるを日月星
とあく尾長鳥との遠里又けらとあく豆のちにさかういんこ
せう家本を紙くはとととととととととととととととととととと



駒鳥 鶴 山羊 雜 粟扇 りくせん 魚扇 いわふか 山並けじどり
魚鱗 あう 又糸本生 日光蘭 日先生營 百合承持 石南社
白根葵 白根人參 茶連 日光萩 千手唐波 岩松 苦枝
石斛 岩草 まほ草 植草 萩蘿 しのぎ 菊活 山椒皮 川海若
あけび 姬鬼の子 素麪

名制役の記と

日光膳

日ぬりもの 曲物

挽物 指物 箕衣 日光漢 兵部重

○日光神 摺 よう 諸方(通法)

禪宮 七町 龍尾 十八町半 清能 一里
御靈丘 十一町 寂光 一里 薩見滝 一里半
新宮 十町 倉滿 十二町 中禪 三里
霧障滝 一里半 四隱比志 十三町半 湯殿山 三里半
中祿湯え 六里 川俣湯え 八里半

- 足尾、六里 上列妙義山 伊香保 楠名山 あいのねり
け足尾の方よりて妙義山まで武十七里餘
- 日光より北財、妙道二筋あり壬生通と今市より板橋まで武里
板橋より麻沼、武里三十町麻沼より奈佐原、三里奈佐原より壬生
三里十八町生より饭塚、壬生通と今市より板橋まで武里
三里奈佐原より日光ゆく所へ二里に七つの里あり岩下村小屋掛石あり
け間板の列樹多くして前く小民家あり
- 今市より入沢まで二里
ばあひごれの方向をよこする原よりてちた山あり三月のままで
雪あり日光ゆく所へ二里に七つの里あり岩下村小屋掛石あり
- 太沢より傳源良まで武里半
うぶ根の列樹多く右のうへんすながひあり墓ノ筆立石あり
- 大谷親もとと絶景あるのをさへとぞ

○徳治節 もう字都宮まで武里半

は街乃竹本不自由 もう少くの民衆に本のうちを家主へ 塚本延
と後く瘦ふ其所のへり幼かよりあへひく澤まにやくれど安全を
みふ床あす教く字都宮もう栗橋までとあり日暮もつて船え
へと車へりとこれら宿舎まで山あく字都えもうふ道く見やう
よう戸ナモ或ナ七里十六町あつむ戸とうび前すでハ奥名御内に附
少人馬の往来とげく放自由なり合事も東海道程大にかけ
ども立くはく都文の深下廣く町長く宿ゆくまくは國の都
會ちうと是もう戸鶴道小列樹の校多く元武里半許あつ

○蓬宿も 石橋まで一里半五町

は間も列樹の松多く民衆跡くあつ

○石橋もう小金井まで三里半

石橋もう堀半豆をうり小築跡ちとて少く寺あつ即其所伏薬



作寺村とひりし
ト下野の薬師寺とて大寺なりし
度帝室
字五年初く戒壇が某作寺を親王もとに建され
一寺元亨親
書ふりへくうれん天子に戒壇ありし
寺南都の東大寺庵の親
世音寺下聖の某作寺三箇所の三官くは外小建寺を奉公ゆる
されどら判道後も称徳天皇崩御の後左遷せられけ寺の別當小
院へとあく今ハ總の小寺とある

○醫王山藥師寺
村ふあい
下野國新作

辛子年作
寺

長立人評

開基溫真和尚

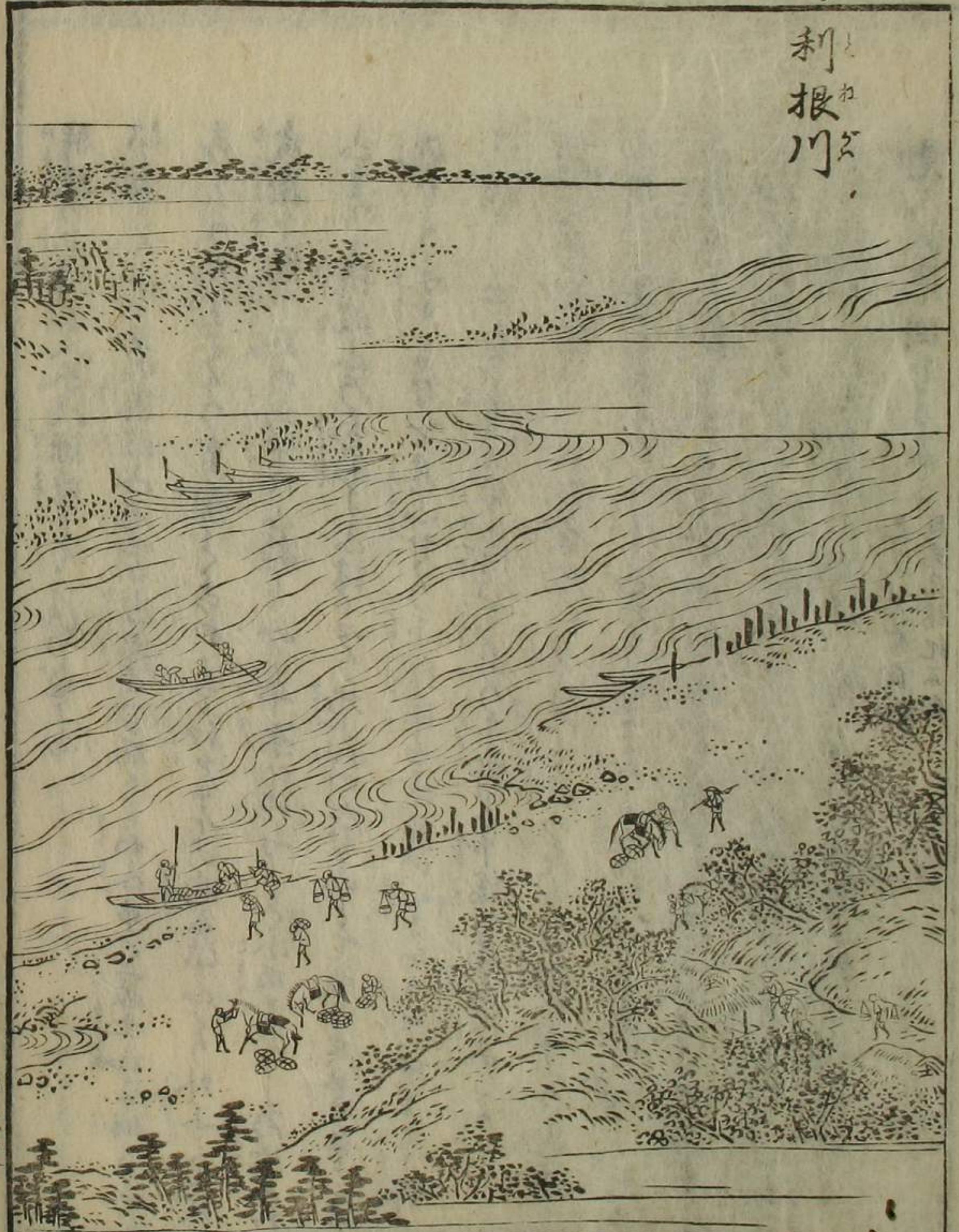
醍醐寺
自著の
画あり

其外什家よ弘法大師の筆れ大般若經三百六十六卷

又晉賢像古筆唐画あり

山寺院むしの處をす防勅願請ありし
が奈良安曇にて勒とす
終し世紀う時を度まく今ハかゝれ村家とあるたゞ郡すとし

解脫の室門入ふれ深境もひひつじ
は意より常陸の筑波山をする山嶺二つある高山ゆく安土宇多
あく九里をくらす都くあれもすな戸牛での間みけずり外ふくら
武巖下総下野の國中にすれくみか平原の坂すく小坂もくね度少
山多く筑波山をすと其小なり下総國も武巖のやくわく度と下野
鷦鷯り水戸もすと其小なり下総のあく下野と下総の西小にあくる
ともすと常陸下総のあく下野と下総の西小にあくる
は國の歌謡れかくに桃李の色甚多く桃の色を賛美の桃より色濃く
うかり李の色を亦より色の方れ坐より李の色坐よりて白い花古
乃能かく小桃を譽む由来西國の桃李は紅より白の色見くらむ
くらむにはあくは桃李の色異ふ紅とく寒りく思ひかねて疑
ては急梨れ花も亦より大桜も花うすつは紅小桃含相蜜柑の花
見くじ寒き國すとあく 己上貝原氏乃



○石橋より小金井まで里半

小金井の道より里東に千葉とて所育民材と千葉助が島江而

○小金井より新田まで武十九町

○新田より小山まで里半

○小山より間く田まで里半六町

城りをとては間しの木多廣門所まく町中に附く寺院あり
とくら結体も小山の木里半町にあり町のつては地と下障常陸
武藏の三ヶ町より分属にとくら城の跡あり結城氏代々の居城より今と
水北侯毛方八千石領と終し結体并安堵もとて禄利ありこくふせ
玄翁和尚那須野の般生石成行と終ひ一財の蓑衣や水晶の珠数室わ
ゆして今ふり

とくら小山よりかの方へ曇野之田島かへをかへ左右とも下障遠くうす小

本巻六冊立

東西幾里とて幸成毛とて林園もあく奥列境までかのとくらの廣世へ
新田を下毛野を名ばずへ寔とす幸也當る

○間く田より柴本まで里三十五町

字都豆波立とて間く田小治とて所と下野と下総の界なり

○柴本より右河までさ立町

は岡ねの別樹長一

○右河より栗橋まで里半

右河の町長と土井大炊頭侯七万石成せしれ城下の町乃至れ
瑞を通ふ少城と道と見とて右河の町瑞毛不利根川の下へ右河
は河あらう右河は城をある古河の下へ名河半て右河あり神家乃
渡とぞ書あり

万葉 本多村毛とて渡をからむらの高家とお移りくふゆくは は
後右 痴痴をとて渡を下へちよめれ私とせよとせよ

○粟搗より幸手まで武里二町

粟搗小国吏所ありけ間よりあ方小利根川あり坂東守の太河よりこもくもはあらねば坂東を節とす上野の奥沿國より流る上野下野武藏下総が色々く隅国門よりして海入

粟搗より幸手までいおり幸手より槽壁龜まで異の方へ

槽壁より松戸今まで毫里半

幸手より松戸まで毫里半

松戸より槽壁まで毫里半

槽壁より越谷まで武里六八町

は日も槽壁より宿には取より子安の方ふ開宿とす所あり世大和

守彦の居深より五万八年を餘すに槽壁のそりはまよ不動院達

園東の山伏の司あり

越谷より草加まで毫里廿八町

○草加より千住まで武里八町

菜かのあの方に移沼そ度サニ三重の池より街道より見くだ

○千住より江戸日本橋まで武里八町

水絵の歌娘一遊女店とあるあくま一宿中小太橋あり長サニ十六間荒川集落にまた兩國橋の流よりこれも江戸までへ太署町續し

二谷の町底邑く新む越阿井の防日本堤よりあら荒川の出陰より

以下の方新吉原傾城町あり

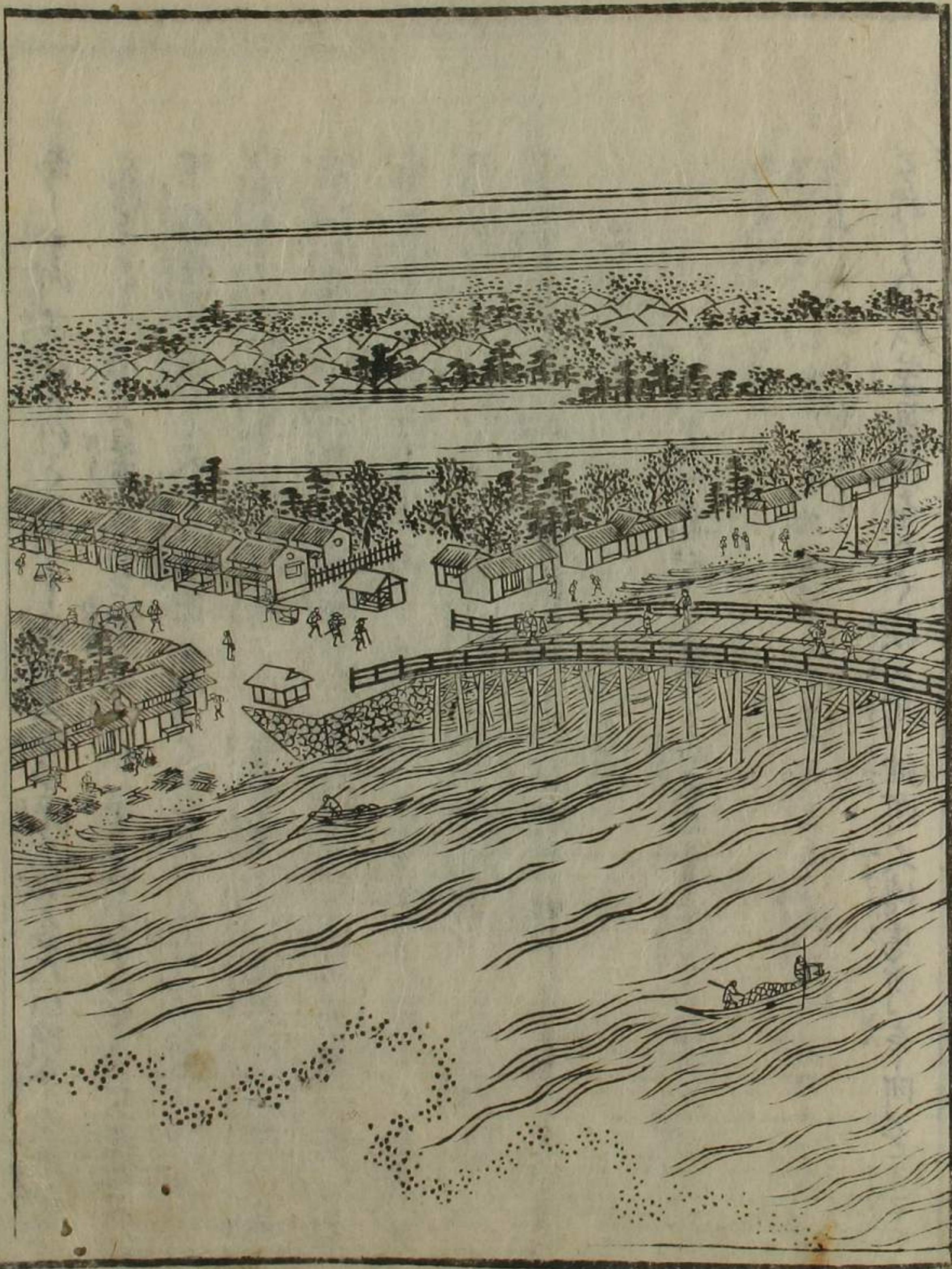
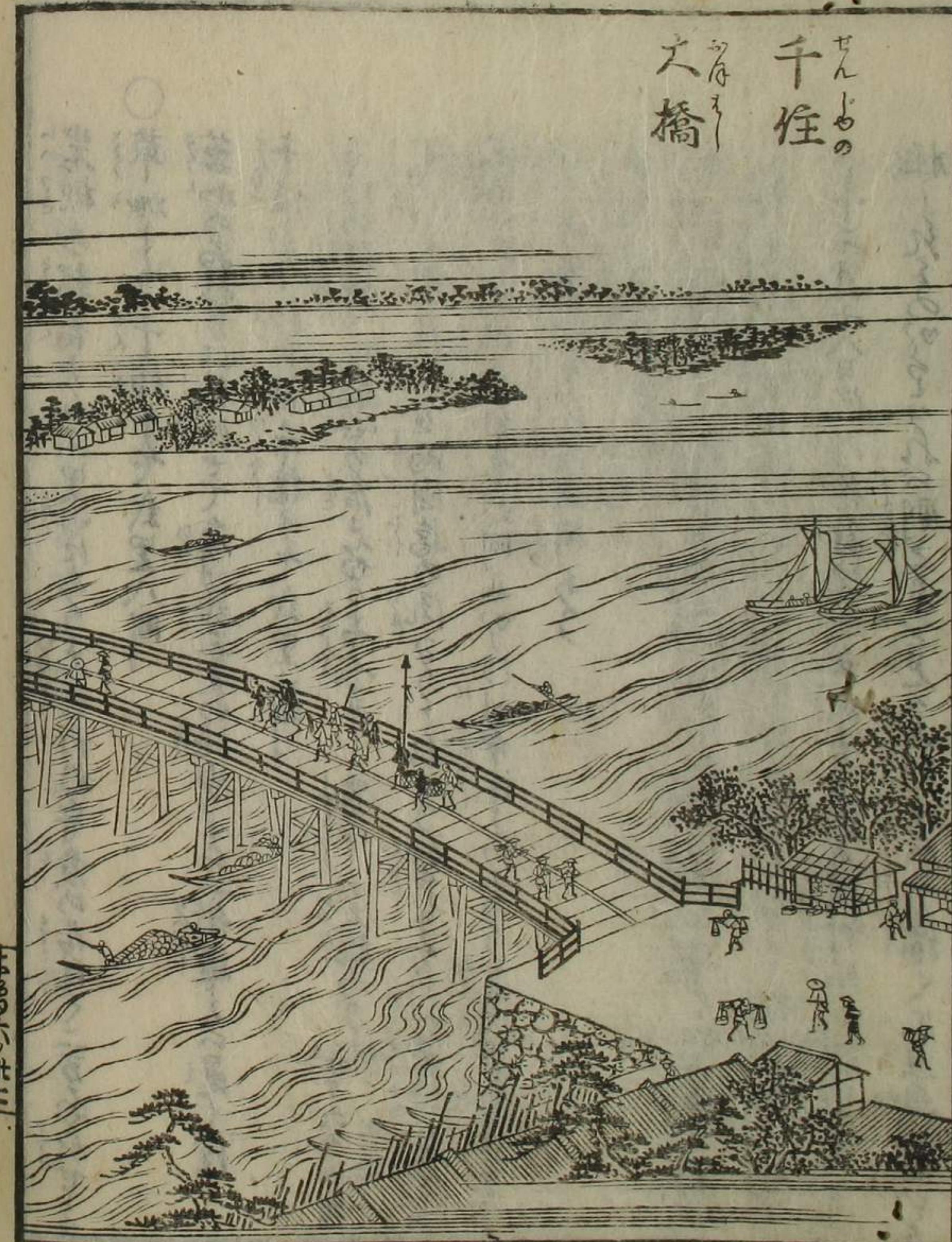
○金龍山法華寺

幸真親世音孝成天皇大化元年壬辰門勝海姫くは吉原御院又米菴院天慶五年安房守平公雅再興をじて推古天皇二十

六年二月十八日漁師捨築浜成吉城より三人法華院下綱代石垣柱より立まゆきをなべ則こゑを見よ親王の子像く不思議の事也。

千住
大橋

せんじゅ
おほはし



あゝまづ藜杖りて柱より假面を當と拂び安坐しけ即今の一擧事
云々を語りて即ち其の事と云ふを詠すて是生
伏見社檜原と至るを又十社梓原と今に藜杖をりてこそ爲能拂ひ辨財天
の社ありこれに園東ニ辨天の其一きり辨財天是拂社圓磨堂石像の笑
姿大足天弘法大師の化神明の社五重塔雲隣隨身門と門へ毎
年正七月の十六日より下さる神佛門の數争海雲の如く又山門の
傍ふ慈惠院の御所の地主の神也又文明王院も之
處が應就の石も又あつ辨天の角落へかの姥が娘城を守り其外子院

○真土山眞土山あり 又緋乳ひることも書くよと本草ほんぞうをすらあらゆり ゆトを
雪天町ゆきてんまちとよす
○城草川しろくさがわ 宮戸川みやどがわとも 間田川まんだがわとも あゝ上を荒川あらかわと名づ 千経川せんきょうがわ
の下流げりゅうなり
○本草見附ほんぞうみつけを入いて 横山町よこやまち 沖町おきまち 大傳馬町だいだんばまち 幸町こうまちを

武藏野

室町小ゆびの日幸移入至原

卷之六

後醍醐天皇
女御を守る
秋のむら
ゆくはよし
葉に秋の
風す
葉之

卷之

ひき一郎やりともぬけてもあたひうねる風のまゝやん
ひくもとくもとくの武義雙木のまゝうづくふ月かけ

大政文

卷之三

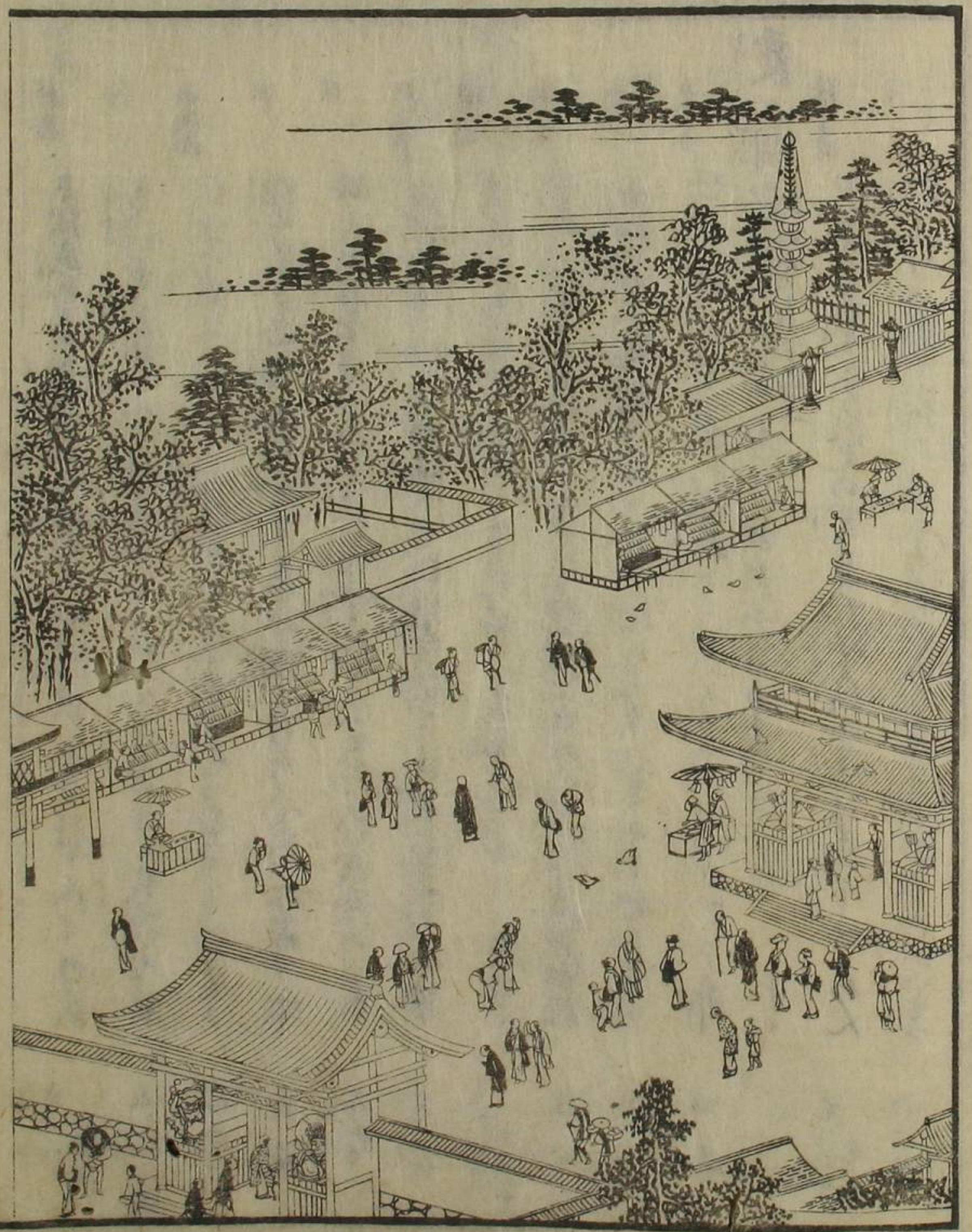
まくよまくうめあらわのくはせうの武藏野原
後拾ごとし
その日れり程も渺々々暮ふる木里遠とおむ
野乃も

西
山
記
序

卷六

すらり一壯もあはれの末も秋夜の風うつ夜うつとも
妻もまた色あへ生んじて一時やうもよきものもあれまこと

住一
家隆



勅拾

延二年

家隆

日 そば麻のよみれまふしめねまを歸ふよみれすりてのま
新後拾 そひまえのちよみれすりてのまをうよみれすりてのま
後承行委

日 いまの病くふゆく 旬のをもふあらむるむエーヨー
新後拾 いまの病くふゆく 旬のをもふあらむるむエーヨー
後承行委

日 雜方すほ軍馬のまよすとすはく 武兵郎のま
新後拾 雜方すほ軍馬のまよすとすはく 武兵郎のま
後承行委

日 ゆ一の報をすみれの白雪せがまかづひまむのま
新後拾 ゆ一の報をすみれの白雪せがまかづひまむのま
後承行委

日 武兵郎のゆくの魚もさへ残ぬくみ草をむす一聲
新後拾 武兵郎のゆくの魚もさへ残ぬくみ草をむす一聲
後承行委

日 すく一聲く葉すくもさへほきの原乃雪せなれ
新后拾 すく一聲く葉すくもさへほきの原乃雪せなれ
後承行委

日 素枕に一旅度のうねの日教つどうマモト一聲く
新后拾 素枕に一旅度のうねの日教つどうマモト一聲く
後承行委

日 支本 むづく秋の原は秋花を花くにたかくふるう耶
新后拾 支本 むづく秋の原は秋花を花くにたかくふるう耶
後承行委

日 霞が闇 実あく一とく
新后拾 霞が闇 実あく一とく
後承行委

日 緋義 もづく秋の原は秋花を花くにたかくふるう耶
新后拾 緋義 もづく秋の原は秋花を花くにたかくふるう耶
後承行委

日 別れゆきの森の園りうととくふ月りとすく先やま
新后拾 別れゆきの森の園りうととくふ月りとすく先やま
後承行委

日 千載 むづく秋の森の事とあまのと缺くあるの追憶くすり
新后拾 千載 むづく秋の森の事とあまのと缺くあるの追憶くすり
後承行委

跋

平安畫工

法橋西邻中和堂



文化二年乙丑三月

大坂書林

和泉屋 源 七
河内屋 儀 助
今津屋 収 三郎
和泉屋 久右衛門
塙 屋 喜 助

小川多左衛門

京都書林

菱屋三郎右衛門
越後屋清太郎
美濃屋小兵衛
西村吉兵衛

